

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32508

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02328

研究課題名（和文）現代中等教育におけるフレネ教育の研究

研究課題名（英文）Research on Freinet Education in Modern Secondary Education

研究代表者

片岡 洋子（Kataoka, Yoko）

放送大学・千葉学習センター・特任教授

研究者番号：80226018

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：フレネ教育は、教師主導で教授中心の学校教育を、子どもの興味・関心に基づく主体的で自由な表現を尊重した教育へと転換しようとする。しかし世界の幼稚園・小学校で実践されてきたフレネ教育は、中学校・高校ではおこなわれてこなかった。その理由として、フレネ教育における学習の系統性と教師の指導性についての論争がある。そうした中、2008年から、フランスのラ・シオタの公立の中学と高校で実験的なフレネ教育が行われてきた。学校観察とインタビューによって、そこでは学習の系統性と教師の指導性と生徒の自主的な関心に基づく主体的で自由な表現の尊重を、どのように結びつけようとしているかについて明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本では中学生の不登校の増加が深刻である。その背景の一つには、高校入試での選抜によるプレッシャーでしかたなく勉強するための学校の授業のつまらなさや、わからなさがある。フレネ教育をはじめとする新教育は、小学校などでは取り入れやすいが中学高校では教科の系統性が重視され教師主導の授業から脱しにくい広がりなかった。そうした中、フランスの中学・高校での実験的フレネ教育の実践は、生徒の関心を引き出しながら教科の系統性を組み立て直す可能性を追究しており、日本の中学校・高校の教育改革に大いなる示唆を与えるという点で学術的、社会的に意義がある。

研究成果の概要（英文）：Freinet Education is a new education that aims to shift from teacher-led and professor-centered school education to one that respects children's independent and free expression based on their interests and concerns. However, Freinet Education, which has been practiced in kindergartens and elementary schools around the world, has not been implemented in junior high and high schools. One of the reasons for this is the controversy about the systematics of learning and teacher leadership in Freinet Education. In this context, CLEF (College Lycee Experimental Freinet) has been conducted since 2008 in a public middle school and a high school in La Ciotat, France.

Through school observations and interviews, we have identified how CLEF attempts to link the systematization of learning and teacher leadership with respect for independent and free expression based on students' independent interests.

研究分野：教育実践学

キーワード：フレネ教育 新教育 中等教育

## 1. 研究開始当初の背景

OECD加盟各国など、少なくとも先進国では、教授中心の教育から、ICTなどを駆使して収集した知識や情報によって世界情勢と身近な生活上の問題を結びつけて考察し、自ら課題を見だし、それに関わる科学や学問の成果について調べ、他者と協同で探求していく学習を経験させる教育への変換が求められている。

中教審答申(2016年12月)は、次期学習指導要領で「社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという」「社会に開かれた教育課程」を各学校がマネジメントし、学習過程を「主体的・対話的で深い学び」の視点で見直し改善するという。それは幼児教育から高等学校まで共通に求められているが、その実現が容易ではないと予想されるのが、中学校、高等学校の中等教育段階である。小学校とは異なり、中学・高校の教師は、担当教科ごとに養成・採用され、自分の担当する教科内容を教えることを主としてきた。「各教科の教育内容を相互の関係性で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していく」ことが、はたして日本の中学・高校で可能だろうか。または、可能にするためには何が必要だろうか。

バカロレア(中等教育レベル認証国家資格)が論述式であることや、リセ(高校)で哲学が必修になっている点などで、フランスと日本の中等教育は異なるものの、現実の生活と関連づけられない教科内容を教師が教え、生徒がそれをノートし、そして試験のために勉強するという点では共通している。そうした現状を変え、自分が生きている現在や将来の世界が結びついていくための中等教育を創ろうと、公立のコレージュ(中学)とリセ(高校)でフレネ教育を実践している教師たちがいる。そこでは、教科横断的に、生徒が生活で得た興味・関心から出発した、数学や地歴など教科の授業が展開されている。その実験的教育の成果を、日本の中等教育に取り入れていくことはできるか。上級学校への進学など中等教育の独自の問題にフレネ教育はどのように取り組んでいるか。フレネ教育の思想と方法が中等教育において展開されるための理論問題とは何か。それらが本研究の核心的な問いであった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、中等教育を教授中心から生徒主体の協同的な学習へと転換するために、フレネ教育の思想と方法が、現代において実践的にどのように展開可能かを明らかにすることである。そのために、フランスのラ・シオタ市にあるコレージュ(中学)とリセ(高校)でのフレネ教育による実験的中等教育 Collège Lycée Expérimental Freinet (CLEF)を研究対象とした。また、国内においては、フレネ教育を全面的に実施しているわけではないが、点数による評価をおこなわないことや生徒の自主性を尊重する学校運営など、CLEFの教育理念との共通性をもつ埼玉県私立自由の森学園中学・高校を比較対象とした。

フレネ教育は、セレスタン・フレネ(1986-1966)が始めた新教育であり、教師主導で教授中心の公立学校の教育を、子どもの興味・関心に基づく主体的で自由な表現を尊重した教育へと転換するための教育である。シュタイナー教育が独自の学校を設立しておこなわれるのに対して、(フランスのバンスにあるフレネ学校を除けば)フレネ教育はどこにでもある公立学校をつくりかえる教育思想・方法として、今も世界各地の公立学校で試みられている。

ただし、日本も含め多くの場合、フレネ教育は小学校での実践が主であった。それに対して、CLEFは、中等教育を、教授中心から、生徒が自らの関心に基づき主体的、協同的に学ぶ教育へとつくりかえようという画期的な実験的教育である。

CLEFは、教授中心の「伝統的な教育」を、フレネ教育でつくりかえようとした二人の教師が、2008年に教育長の承認を得て公立のコレージュとリセにフレネクラスを設置して始めた。その後、フレネ教育に賛同する教師たちが赴任して試行錯誤を重ね、近隣の小学校にもフレネクラスをつくり、生徒や親たちと新しい教育のありかたを探求して、来年10周年を迎える。この間、フランス教育省からも中等教育の改革において教育効果を発揮していることが認められ、フランス語圏を中心に注目が集まっている。日本では、細尾萌子、大津尚志、他「フレネ実験教育コレージュ、リセにおけるカリキュラム開発の独自性」(『フランス教育学会紀要』第24号、2012年9月)があるが、その後、CLEFの訪問による研究は継続されていないため、本研究において、日本の中等教育の今後にとって示唆に富むCLEFでの10年間の実験的教育の展開を明らかにし、日本国内に発表することは大いに意義がある。

## 3. 研究の方法

研究方法としては、CLEFのうち、主にジャン・ジョレス中学の以下の資料を収集し、分析をおこなった。またジャン・ジョレス中学のフレネクラスの教員がマルセイユ市内のロンシャン中学に移ったのを機に、フレネ教育を実践する意志のある教員が集まり、管理職によって認められてフレネクラスが発足した。そのロンシャン中学でも授業観察、資料収集、インタビューを行った。

教師、生徒、保護者インタビュー、授業参観、教師との研究討議等の記録や文字おこしデータ(フランス語を和訳)

教師による実践報告や論文(フランス語を和訳)

生徒の発表や自由作文(フランス語を和訳)

時間割、評価表、授業プリント等のカリキュラム資料（フランス語を和訳）

2018年と2019年にジャン・ジョレス中学とロンシャン中学の現地調査をおこない、上記のデータを集約した。また日本でのフレネ教育に関する先行研究の検討をおこない、CLEFでの実験的教育が日本の中等教育にとってどのようなインパクトをもたらすかについて検討した。

#### 4. 研究成果

フレネ教育の中等教育での展開に関する論点とCLEF設立の経過を以下のようにまとめた。なお実践分析に即しての論述は、今後、書籍化して公表する予定である。

##### 1) カリキュラムとは何か

佐藤学によれば、「カリキュラム」は制度的に定められた教科の課程を意味する言語として近代教育において定着した。しかし20世紀初頭のアメリカにおいて意味の変換を遂げる。

「・・・教育行政が定める教育内容と学校において教師が創造する教育内容とが区別され、教育行政が定める教授要目（シラバス）が『学習指導要領（course of study）』と呼ばれ、学校において教師が創造し生徒が経験している教育内容の過程が『カリキュラム』と呼ばれるようになった。」（佐藤学『教育方法学』岩波書店1996年、p106）

カリキュラムは、何を教えるかを定めたシラバスと学習指導要領とは異なり、教師の創造と生徒が経験している教育内容の過程だということ。こうしてカリキュラムには「学習経験の総体」という定義が成立した。

佐藤はこの「学習経験の総体」という概念のルーツは、20世紀初頭の新教育をリードしたJ・デューイの著作に求めることができると述べてもいる。何をどう順序立てて学ぶべきかが決められたシラバスや学習指導要領がカリキュラムなのではない。教師の創造と生徒の経験がカリキュラムなのである。したがってカリキュラムはいつでもどこでも再現できるものではなく、ある教室での生徒と教師の学習の経験という固有で一回性のものである。その経験が経験された教師や生徒に記述され、記憶されて、意味が与えられていくのがカリキュラムと言えよう。

佐藤はさらに1970年代以降、「再概念主義者」と呼ばれる教育学者たちによる「カリキュラム」の再定義がおこなわれるようになったという。「再概念主義者」たちは「過程 産出モデル」の「カリキュラム」が、生産性と効率性を基準として産業主義社会と消費社会への適用をはかるシステムとして機能している点を批判し、カリキュラムを学習者の経験に即して再定義する運動を展開した。（p107）

その一人であるヒューブナーは、「カリキュラムの現象を教師と生徒の『個人誌』として歴史的・社会的・美学的・倫理的な言語で記述することを提唱」し、「カリキュラムは、教育内容のプロセスやシステムである以前に、一人ひとりが教室で体験している個性的で実存的な経験そのもの」と捉えた。

ここで「カリキュラムの現象」として述べられている教師と生徒の「個人誌」とは、たとえば教師にとっては実践記録であり、生徒にとっては学習経験を自分の言葉で表現した自己評価の記録であろう。一般的な「教育内容のプロセスやシステム」があるとしても、教師にも生徒にも一人ひとりの実存的な経験として生み出され、個人誌となっていくものがカリキュラムである。佐藤は『カリキュラム』とは、その語源（人生の来歴）が示唆するように、一人ひとりのこの経験の軌跡として表現される『学びの経験の履歴』なのである」と述べる。学びの経験の軌跡が表現される一人ひとりのカリキュラムをつくる教育とはどのようなものか。学習の経験がテストで採点され、点数や評価グレードで示されるような現代に支配的な教育のあり方ではないだろう。

私達が研究対象としてきた自由の森学園とフランスの中等教育での実験的フレネ教育CLEFに共通するのは、評価を点数によらず、生徒の自己評価と教員の評価でつくっていくところにある。それはヒューブナーが述べた、教師と生徒の「個人誌」として「歴史的・社会的・美学的・倫理的な言語で記述する」という行為にあたるのではないか。点数により自己が抽象化され、序列の位置での自己認識を持たされてしまうのではなく、個性的で実存的な学習経験を自分なりの言葉で表現し、自己を他者に向けて語り、他者と対話しながら、自己をつくっていく。そうした一人ひとりのカリキュラムが可能となる中学校教育を、中学校での実験的フレネ教育と自由の森学園の教育を手がかりに考えてみた

##### 2) 中学校でのフレネ教育は果たして可能か

100年の歴史を持ち、世界の幼稚園・小学校で実践されてきたフレネ教育が、中学校・高校には広がらなかったのは何故だろうか。フレネ教育に限らず、子どもの生活と教育をむすびつけ、子どもが自分の興味関心から学習に向かっていくような新教育が幼児教育や初等教育で盛んにおこなわれた時代でも、中学や高校などの中等教育では、何を学ぶべきかという教授中心になり、教師は生徒が試験で点数が取れるようにすることに熱心にならざるを得ない。フレネはそうした伝統的な教育を変えようとしたが、初等教育までにしか通用しない教育を考えていたわけではなかった。

佐藤広和は、フレネ教育が「学習の系統性」と「教師の指導性」という視点からよく批判されるなされること、それは1950-52年にフランスで起きたフレネ教育をめぐる論争の中で最大の論点でもあったと述べている（佐藤広和 p113）。これはフレネ教育に限ったこと

ではなく、子どもの興味や経験に基づいて認識や感情を発達させようとする新教育に共通して向けられた批判である。つまり教科が基礎を置く学問の知見に沿った系統性に基づいて教師が教えること(指導性)を軽視することによって、子どもの認識の発達を妨げてしまうという批判である。

佐藤広和はフレネ教育批判の中心人物だったスニデールの批判は第一義的には新教育全体に向けられ、その一例としてフレネ教育が取り上げられていたと述べている。この系統性と教師の指導性は、小学校よりも教科別に教員が配置されている中学・高校の方が学校教育の前提となっている。そのことがフレネ教育は小学校には広がっても、中学高校では1教科で個人的に取り組む教員はいたとしても複数教科にまたがって組織的に取り組むことは難しいことの一因になっている。

フランス哲学者の金森修は、佐藤広和のスニデールによるフレネ教育批判を参考にしつつ再分析したフレネ研究の論文の中で、結論的に「フレネ教育は基本的には初等教育の位相で力を発揮するものだろう」と述べ、中等教育でのフレネ教育については懐疑的である(金森修「フレネの教育思想 その可能性と射程」橋本美保、田中智志編著『大正新教育の思想』東信堂、2015年、p119)。

「子どもの経験の直接性を多少とも原基的なものとするフレネ教育は、その直接性を越えた位相に存在する知識の経験可能性をどのように保障できるのだろうか。」(p121)

「人間の直接的経験からはほぼ出てこないにもかかわらず、人間の文化にとって重要な知識というものは存在し、それは、フレネ風の子どもの探索からはみえてこない蓋然性の方が高いということだ。」(p123)

金森はこのように述べ、「その象徴的例証」として「歴史的な知識」をあげている。

「膨大な歴史的知識は子どもの周囲環境の直接的観察からはやはり出てこないものなのだ。それをどう考えるか。たとえば戦争の歴史的知識がないと「成人後、政治的判断を重要な場面で間違える確率が高く、そうすると歴史認識一般をそう簡単に放擲してしまえば、やはり生活上も問題が生じるといわなければならないのである」(p124)

「生活準備主義と連続的に繋がるフレネ教育では、歴史認識一般を取りこぼす可能性が高い以上、それはこの教育法にとって大きな瑕疵にはならないだろうか」(p125)

このように金森は、子どもの興味や経験に基づいて行われるフレネ教育は、歴史的知識と出会うことを困難にするのではないか、それは大きな瑕疵になると懸念する。しかし、「だがその欠点は少なくともある程度までは対処可能なものだ」とも付け加える。「その部分には教師が能動的に介入し、子どもの生活経験からは出てこない過去の人間文化があるということ子どもに気づかせる工夫をするべきだ」という。つまりフレネ教育をはじめ新教育に対する批判で弱いとされる「教師の指導性」をむしろ積極的に発揮して、「能動的に介入」する必要があるというのである。

金森の言うことはもっともである。しかし実践的には難しい。だからこそ中学・高校でのフレネ教育は行われてこなかったのだ。そして現代のフランスで中等教育においてフレネ教育が実験的にどのように行われているかを明らかにすることの研究的意義もここにある。

佐藤広和は教師が教えたい授業の導入に子どもの興味が利用されるだけの例をあげている。

「子どもが足の出たオタマジャクシのことを日記や絵にかいてきたりすると、教師の頭はどうやって教科書のカエルに結びつけるかでいっぱいになる。子どもの日記を紹介し、クラスの子どもたちの話で「教室がわきたっていくと、顔は笑っていても教師の心の中は穏やかでなくなってくる。『早く本筋(教科書の中のカエル)に戻さなくては』とあせり、こう言ってしまふ。」

「ハイ、静かにして! さっき足が出たオタマジャクシのことを話してくれたよね。とってもいいところに気がついたね。今日はこの勉強をしましょう。教科書のx xページを見なさい」(pp. 75 - 77)

子どもの興味がどう展開するかは一人ひとり異なるので、一斉授業になじまない。そのため、子どもの興味は、教師が教えたいことを教えるための手段に利用されるにすぎない。興味それ自体が目的化していかない。それは今の学校教育の中で、一人ひとりの学習履歴としてのカリキュラムをつくることの難しさの問題である。しかし、後で述べるが、CLEFの地歴教師のエレーヌは、金森がフレネ教育への懸念として示した歴史的知識を生徒一人ひとりの興味関心につなげる授業を試みている。

### 3) フレネの興味論

「興味の中心 centres d' intrérêts 」から「興味の複合 complexes d' intrérêts」へ

フレネの「興味の複合」についての考え方は、子どもの発達段階を踏まえており、中等教育への応用の展望を含めたものであった。佐藤広和は、戦前のフレネがドクロリーの「興味の中心」に影響を受けたが、それに限界を感じていたこと、しかし本格的に「興味の中心」を脱して「興味の複合」について論じていくのは1960年代だと述べ、フレネの「興味の複合」論について次のように解説している(p79 - 80)。

「フレネが『興味の複合』について語る時、意識的に整理はされていないが、大きく見れば2つの複合について述べていると思われる。すなわち、第一には個人の興味の追求の仕方における複合であり、第二には学級内のひとりひとりの子どもの異なる興味が複合していくという意味での複合である。」

佐藤はこのように、フレネのいう興味の複合を、子ども一人ひとりの自分の興味を追求していく仕方における複合と、学級の子どもが異なる興味を複合していくという二つの意味に分ける。

さらに個人の追求における複合は、以下の横系的、縦系的な二つの面での複合が考えられるという。

生活が複雑で複合的なものであることから、一つの事象が様々な関連性を持っていることに由来する複合性。言わば問題の横系的（関連領域、学際領域）な展開。

問題の縦系的な展開であり、より専門的な追求や、歴史的に逆上るような追求。

そして佐藤は「生活は本来、社会的・歴史的交差のドットであるし、科学技術はより基本的な要素から応用への系統性とともな社会的適用形態としては様々な関係の中で実在するわけだから、横系、縦系の複合は当然と言える」と述べ、「興味の複合」が横系的な学際性と、縦系的な系統性を含む概念であったとする。

そのことによって「ドクロリーの『興味の中心』が教育内容の所与性を脱却できなかったのとは対称的に、フレネの興味論は科学・文化の総体に絶え間なく（生涯学習的に）接近することを可能にした」のだと述べる。つまりドクロリーの「興味の中心」は子どもの興味と所与の教育内容を結びつけて配列していったのだが、フレネの「興味の複合」は興味自体が持っている複合性が子ども一人ひとり異なる追求を必然化するという考えかたである。

学級の子ども相互の興味の複合について佐藤は、「これこそドクロリーの方法的『興味の中心』との対立点であった」という。フレネの興味の中心に対する批判は、クラス全体を一つの興味でまとめ上げることの困難さによるものだった。ドクロリーの興味の中心は主題を設定し、教育内容を編成する原理や方法であって（p70）所与の教育内容が定められてしまう。しかし、一人ひとりの興味は異なり、主題にまとめあげられるものではない。一人ひとり異なる興味が複合していくことこそが重要なものだった。それでも就学前や初等クラスでは興味の中心でまとめることができる。

「小鳥の死、新しい花、友だちの感動的な話、風や雨、夢で見たまぼろしといった出来事に長い間夢中になる。そしてこれらのことは、クラス全体を一緒に激しくふるわせる。興味の中心の掘り起こしは多分ほとんど永続的で、教育全体を生き生きさせる。」

しかし発達段階が上がると状況は変わる。

「中級コースから中学ではこうはならず、一色に塗りつぶすような興味の中心は例外にすぎない。」

「中級コース、最終学年、普通教育コレージュ及びリセ1年。この段階ではすでに述べたように興味の諸中心は例外的にしか広がらない。現れたり、浮かび出るのはどちらかと言えば手がかりであり、それについてより体系的に前進させることができるものである。これらの学級について言いたいことは、現れると同時に一つの興味の中心を掘り起こす頃はもはや必要不可欠ではないということである。そのうえこの掘り起こしは、特別な準備無しに成熟できることはまずないようなものでしかない。」（p81）

低学年の子どもたちのようにクラス全体を生き生きとさせるような興味の中心となるテーマを掘り起こすことは、中学年以降では必要ではない。むしろ現れる「手がかり」を「体系的に前進させる」必要がある。そしてそのためには「特別な準備」が必要となる。金森が言うような教師の能動的な介入によって「手がかり」を「体系的に前進」させなければならない。

そのためにフレネは、大人が教養を高めたいときに用いる方法をとると佐藤は述べている。

「だからこの段階では、多彩な興味の複合に応える手がかりの多様性を持たなければならない。フレネは、教科書による授業の代わりに『教養を高めたい大人が使っているものに匹敵する方法』、つまり図書館での学習、自由研究やコンフェランスといった方法をとっている。特に子どもの個人的（場合によってはグループの）追求がコンフェランスと言われる研究方法でなされることの意味は大きい。」（p81）

ここでの「自由研究やコンフェランス」は、各自が自分の興味からテーマを立てて調べたことを発表し意見を交わし合う、いわば大学のゼミナールのようなものだろう。ジャン・ジョレス中学校のフレネクラスを初めて訪問したとき、まるで大学のゼミナールのような第一印象だった。興味の複合とは、一人ひとりがそれぞれの問いを持つことであり、その問いが自分の中で様々な領域のことがらと結びついて発展し、その問いにもとづく発表を相互に聞きあい共有することで複合していくことである。それを生徒が自律的かつ協同的におこなっていくことこそ、中等教育におけるフレネ教育が実践しようとしていることである。

ジャン・ジョレス中学校におけるフレネ教育の実践分析を進めてきたが、まだ継続中であり、これらの研究成果は書籍として公表の予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計36件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 片岡洋子	4. 巻 500号
2. 論文標題 ジェンダー・性の多様性と生活綴方	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 作文と教育	6. 最初と最後の頁 16-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡洋子	4. 巻 925号
2. 論文標題 人権の要としての「同意」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 5-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡洋子	4. 巻 927号
2. 論文標題 多様な大人と出会う学校を	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 88-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤隆	4. 巻 326号
2. 論文標題 フィンランドの教育からいま何を学び直すのか	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 たのしい体育・スポーツ	6. 最初と最後の頁 52-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤隆	4. 巻 928号
2. 論文標題 「令和の日本型学校」と教師のゆくえ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 5-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓦林亜希子	4. 巻 118号
2. 論文標題 フランス・ヴァンスのフレネ学校の教育理念と現在の実践	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 フレネ教育研究会会報	6. 最初と最後の頁 25-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓦林亜希子	4. 巻 第8集
2. 論文標題 子どもの自由な自己表現を尊重する生活綴方の歴史	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 都留文科大学教職センター紀要	6. 最初と最後の頁 104-109
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田綾	4. 巻 763号
2. 論文標題 学校・教室において「性の多様性を尊重する」とはどういうことか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 生活指導	6. 最初と最後の頁 35-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田綾	4. 巻 765号
2. 論文標題 「性の多様性」と生活指導 「討議づくり」の可能性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 生活指導	6. 最初と最後の頁 60-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡洋子	4. 巻 906号
2. 論文標題 「自己の育ち」と子ども理解	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 69-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤隆	4. 巻 2021年版
2. 論文標題 GIGAスクールで学校はどう変わるのか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 子ども白書2021	6. 最初と最後の頁 78-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤隆	4. 巻 905
2. 論文標題 「評価」に管理される教育の時代	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 50-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田綾	4. 巻 756
2. 論文標題 深層の物語を読みとき、読みひらくということ：権利に開かれた学びと参加	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 生活指導	6. 最初と最後の頁 56-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡洋子	4. 巻 892号
2. 論文標題 校内フリースクール 可能性と課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 48-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡洋子	4. 巻 898号
2. 論文標題 つながり、学びあうためのオンライン	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡洋子	4. 巻 900号
2. 論文標題 現代における教育実践記録	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 69-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤隆	4. 巻 898号
2. 論文標題 コロナが照射する日本の教育課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 6-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤隆	4. 巻 1月号
2. 論文標題 GIGAスクール構想と「主体的・対話的で深い学び」のゆくえ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 さいたまの教育と文化	6. 最初と最後の頁 25-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤隆	4. 巻 901号
2. 論文標題 「令和の日本型学校教育」とはなにか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 96-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤隆	4. 巻 943号
2. 論文標題 「個別最適な学び」の何が問題か	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 135-142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓦林亜希子	4. 巻 860
2. 論文標題 子どもの声に耳を傾け、待つことの大切さー「できない」の裏にある「やりたい」を見抜き支援する	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 生活教育	6. 最初と最後の頁 60-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡洋子	4. 巻 884号
2. 論文標題 いろいろな性を知り、自分をみつめる	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 96-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡洋子	4. 巻 885号
2. 論文標題 自己を形づくることを支える 保育園、学童保育、少年刑務所で	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 33-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡洋子	4. 巻 661号
2. 論文標題 性の多様性と人権を尊重する社会と教育へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 千葉教育	6. 最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤隆	4. 巻 888号
2. 論文標題 専門職の誇りと自覚のありか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 59-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓦林亜希子	4. 巻 31号
2. 論文標題 日仏の高等学校における教育課程改革	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フランス教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 67-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Henri-Louis GO, Akiko KAWARABAYASHI	4. 巻 2019-2020
2. 論文標題 La valeur de bienveillance en education. Une cooperation France-Japon en "Pedagogie Freinet" 2 (教育における「子どもをありのままに受け入れる」ことの意義ーフレネ教育における日仏間の協働的実践2)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Les valeurs en education Transmission, conservation, novation [Laboratoire LISEC -Universite de Lorraine](仏口レーヌ大学LISEC研究所紀要ー”教育における価値体系：発信と受信、そして革新”)	6. 最初と最後の頁 256-274
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ル・ルー プレندان	4. 巻 33号
2. 論文標題 Compte-rendu d'experience pedagogique : sous-titrage de videos a l'aide des outils de YouTube	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Bulletin des Rencontres Pedagogiques du Kansai	6. 最初と最後の頁 132-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡洋子	4. 巻 864号
2. 論文標題 恵那の生活綴方教育への歩み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 作文と教育	6. 最初と最後の頁 52-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡洋子	4. 巻 865
2. 論文標題 恵那の生活綴方教育への歩み第2回	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 作文と教育	6. 最初と最後の頁 52-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡洋子	4. 巻 866
2. 論文標題 恵那の生活綴方教育への歩み第3回	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 作文と教育	6. 最初と最後の頁 52-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡洋子	4. 巻 867
2. 論文標題 恵那の生活綴方教育への歩み第4回	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 作文と教育	6. 最初と最後の頁 52-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 片岡洋子	4. 巻 876号
2. 論文標題 書きことばと感情表現 - 生活実感を伝えあう	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 36-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤隆	4. 巻 6月号
2. 論文標題 教師の仕事をつづける文科省流資質能力論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 5-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤隆	4. 巻 9月号
2. 論文標題 教育改革の新段階 追いつめられる教師たち	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 68-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Henri Louis GO, Akiko KAWARABAYASHI (アンリ＝ルイ・ゴ、瓦林亜希子)	4. 巻 2018-2019号
2. 論文標題 教育における「子どもをありのままに受け入れる」ことの意義 - フレネ教育における日仏間の協働的实践 (原題はフランス語)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 仏口レーヌ大学LISEC研究所紀要 - "教育における価値体系：発信と受信、そして革新" (原題はフランス語)	6. 最初と最後の頁 .143-154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 瓦林亜希子
2. 発表標題 子どもの自由な自己表現を尊重する生活綴方の歴史（発表は仏語）
3. 学会等名 フランス国立教師教育高等研究所主催国際シンポジウム「学校での生きづらさー問われるべき現実」（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 瓦林亜希子
2. 発表標題 戦後日本の教育における生活綴方教育運動の継承（発表は仏語）
3. 学会等名 フランス・トゥールース大学外国文学・言語・文化学部日本語学科修士課程ゼミナール（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山田綾
2. 発表標題 「評価」の観点から生活指導実践の価値を問う インターセクショナルに現実を共に読むことから
3. 学会等名 日本生活指導学会60回大会（東京都立大学）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 ル・ルー ブレندان
2. 発表標題 フランス植民地帝国の周辺 - グアドループとニューカレドニアの日本人労働者による労働運動 -
3. 学会等名 グローバル・ヒストリーと比較史の交錯 フランス/アルジェリアと日本/朝鮮の植民地化・脱植民地化を中心に
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ル・ルー プレンダン
2. 発表標題 フランスの中等教育におけるフレネ教育の実践-CLEF と CCEF の事例を中心に-
3. 学会等名 フレネ教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 瓦林亜希子
2. 発表標題 ヨーロッパにおけるフレネ教育の特異性 自然観、カリキュラム、教育運動の観点から
3. 学会等名 フレネ教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 瓦林亜希子
2. 発表標題 特別講演「フランス・ヴァンスのフレネ学校の教育理念と現在の実践」
3. 学会等名 フレネ教育研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 慎 蒼宇、ル・ルー プレンダン（仏語翻訳 / 通訳）
2. 発表標題 日本の植民地化と朝鮮の民族運動 「植民地戦争」の視点から
3. 学会等名 植民地化・植民地支配・脱植民地化の比較研究 フランス・アルジェリア/日本・朝鮮関係を中心に
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鄭 栄桓、ル・ルー プレングダン（仏語翻訳 / 通訳）
2. 発表標題 日本への朝鮮人移住および強制動員の歴史とその法的地位 植民地期から解放直後を中心に
3. 学会等名 植民地化・植民地支配・脱植民地化の比較研究 フランス・アルジェリア/日本・朝鮮関係を中心に
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉澤文寿、ル・ルー プレングダン（仏語翻訳 / 通訳）
2. 発表標題 「1965年体制」の現在地 2018年韓国大法院「10・30」判決から考える
3. 学会等名 植民地化・植民地支配・脱植民地化の比較研究 フランス・アルジェリア/日本・朝鮮関係を中心に
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ウォルター・ブリュイエール=オステル、ル・ルー プレングダン（仏語翻訳 / 通訳）
2. 発表標題 1970年代以降のフランスにおけるアルジェリア戦争とその記憶の教育
3. 学会等名 植民地化・植民地支配・脱植民地化の比較研究 フランス・アルジェリア/日本・朝鮮関係を中心に
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 瓦林亜希子
2. 発表標題 ヨーロッパにおけるフレネ教育の特異性—自然観、カリキュラム、教育運動の観点から
3. 学会等名 日本フレネ教育研究会主催 フレネ教育入門講座 第3回発展編 I
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 瓦林亜希子
2. 発表標題 オランダの幼稚園・小学校におけるフレネ教育－学校建築的観点から
3. 学会等名 日本生活教育連盟第71回夏季全国研究集会名古屋大会（名古屋大学）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 瓦林亜希子
2. 発表標題 フランス・オランダのフレネ教育の現状
3. 学会等名 日本フレネ教育研究会(お茶の水女子大学附属小学校)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ル・ルー ブレندان
2. 発表標題 シンポジウム「日本とフランス海外領土」趣旨説明
3. 学会等名 日本仏学史学会 第43回全国大会(明治大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ル・ルー ブレندان
2. 発表標題 グアドループ島・レユニオン島・ギアナへの日本人労働者の派遣（計画）
3. 学会等名 日本仏学史学会 第43回全国大会(明治大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ル・ルー ブレンダン
2. 発表標題 ニッケルと砂糖、金とコーヒー-フランスの植民地と日本人出稼ぎ移民-
3. 学会等名 日本移民学会第28回年次大会(南山大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 ル・ルー ブレンダン
2. 発表標題 幕末 - 明治期のパリ外国宣教会の宣教活動
3. 学会等名 国文学研究資料館 日本関連在外資料調査研究・活用事業 パチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書調査研究・保存・活用 マレガプロジェクト(国文学研究資料館)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 小玉亮子、一見真理子、浅野俊和、太田素子、田中友佳子、高田文子、松島のり子、織田望美、首藤美香子、福元真由美、浅井幸子、塩崎美穂、阿部真美子、瓦林亜希子、田中謙、浜田真一、添田久美子、楠瑞希子、小田倉泉、水野恵子、村知稔三、北野幸子、近藤幹生、	4. 発行年 2022年
2. 出版社 萌文書林	5. 総ページ数 392
3. 書名 幼児教育史研究の新地平	

1. 著者名 小山田紀子、吉澤文寿、慎蒼宇、ル・ルー ブレンダン、ダホー・ジェルバル、渡辺司、福田邦夫、鄭栄桓、アフメド・マヒウ、カメル・シャシュア、鶴戸聡、申銀珠、ウォルター・ブリュイエール=オステル、平井美津子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 藤原書店	5. 総ページ数 544
3. 書名 植民地化・脱植民地化の比較史	

1. 著者名 深澤広明、吉田成章、熊井将太、船越 勝、黒谷和志、折出健二、豊田和子、長瀬美子、山田綾、高木啓、湯浅恭正、他8名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 192
3. 書名 学習集団づくりが育てる「学びに向かう力」 授業づくりと学級づくりの一体的改革	

1. 著者名 歴史教育研究会（田中暎龍、鈴木哲雄、小瑤史朗、小林知子、小松伸之、山口公一、山崎雅稔、阿久津祐一、國分麻里、島田哲弥、高柳昌久、日高慎、ル・ルー プレンダン、金佳妍、金広植、具蘭熹、柳準相、朴中鉉、申幼兒、李慶勲、趙美暎）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 280
3. 書名 日韓歴史共通教材 調べ・考え・歩く 日韓交流の歴史	

1. 著者名 大学初年次教育研究会（森谷公俊、深谷幸治、岡部昌幸、池周一郎、草野いづみ、甲斐祥子、賀村進一、村上文、ル・ルー プレンダン）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大月書店	5. 総ページ数 272
3. 書名 大学1年生からの 社会を見る眼のつくり方	

1. 著者名 子安 潤(編著)、山崎準二(編集代表)、高野和子(編集代表)、久田敏彦、湯浅恭正、山田綾、白石陽一、小柳和喜雄、福田敦志、高橋英児、趙卿我、竹川慎哉	4. 発行年 2019年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 192
3. 書名 教科と総合の教育方法・技術	

1. 著者名 友田昌宏（編）、西澤美穂子、山添博史、ル・ルー プレンダン、ベルテッリ・ジュリオ・アントニオ、森田朋子、上白石実	4. 発行年 2019年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 253
3. 書名 幕末維新期の日本と世界 - 外交経験と相互認識	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	瓦林 亜希子  (Kawarabayashi Akiko)  (10780249)	都留文科大学・教養学部・准教授   (23501)	
研究分担者	山田 綾  (Yamada Aya)  (50174701)	四天王寺大学・教育学部・教授   (34420)	
研究分担者	佐藤 隆  (Sato Takashi)  (70225960)	都留文科大学・教養学部・特任教授   (23501)	
研究分担者	L E R O U X B r e n d a n  (Leroux Brendan)  (80610203)	帝京大学・外国語学部・准教授   (32643)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------